

死海・エルサレム方面へ

テル・レヘシュの発掘調査作業が終わり、宿舎のキブツで最後の夜を過ごしたボランティアの学生たちは、旅行会社が手配した貸し切りバスで、死海、エルサレム方面への一泊旅行に出かけ、その足でテル・アヴィブの空港から帰路に着く。現地ガイドが道中の案内をしてくれるが、調査団のスタッフとして、昨年は私がツアーに参加し、今年は、天理大学の卒業生でツアー・コンダクターを職業にしている平川敬康さんがボランティアたちに同行した。

ヨルダン川沿いに、対岸の山並みを遠くに眺めながら、バスは南へと進み、パレスチナ自治区のエリコの町を通り抜けると、エメラルドグリーン色をした死海の風景が目の前に現れる。海抜マイナス400mの地の底にある死海は、塩分が高く、そのミネラルを利用した特産品の石けんや化粧品用クリームを製造するため、水が汲み上げられ、近年は水量が減少しているようだ。最初に見学するクムランの遺跡は、1947年、死海文書が見つかった洞窟の近くにあり、紀元前2世紀～西暦1世紀にかけてユダヤ教の一派、クムラン教団の人々が共同生活を行っていた町の跡だ。発掘されて、整備・公開された遺跡では、食堂や貯水槽、ローマ式の浴場、穢れを清める沐浴用の水槽（ミクヴェ）などを見ることができ、当時の人々の暮らしぶりがよくわかる。

黄金のエルサレム

ボランティアの学生たちの多くは、イスラエル旅行が初めてで、死海での浮遊やエルサレムの旧市街散策など、ご当地ならではの体験を楽しみにしている。死海のビーチで開放的な時間を過ごした後は、標高800mの山上にあるエルサレムをめざして、一路、坂道を駆け登るのだが、車窓を流れるのは、ベドウィンの黒いテントが点々と並び、ラクダや羊が群れる荒野の風景だ。しばらくすると、パレスチナ自治区の東エルサレムを迂回する新しい道路に入り、トンネルを越えると、いつの間にか、独特の雰囲気をもった西エルサレムの町並みが視界に入ってくる。エルサレムの町は、建物にエルサレムストーン（赤みを帯びた石灰岩）を用いることが法律で定められていて、オリーブ山の展望台から眺める夕暮れの町は、うっすらと輝いたように見える。キドロンの谷を挟んで、オスマン・トルコのスレイマン大帝の時代に築かれた城壁が見え、その向こうに、黄金色に輝く大きなドームが聳えている。これが、イスラム勢力の征服後、ムハンマドの昇天の場に建てられた「岩のドーム」で、中には巨大な岩があり、かつてユダヤ教の神殿の至聖所があったとされている。ローマが支配した時代には、同じ場所に、ユピテル神殿が建てられた。

ボランティアの一行が宿泊するホテルは、旧市街の向こう側に広がる西エルサレムの新市街にあり、再びバスに乗って移動する。ちょうど金曜日なので、日没からはユダヤ教の安息日（シャバット）となり、店が全て閉まってしまうので、ホテルの中のレストランで夕食を取る。部屋に行くためのエレベーターも、開閉のボタンが作動しない「シャバット・エレベーター」になっていて、全ての階で強制的に止まり、自動的にドアが開く。

記憶の戦場

翌朝は、ホテルをバスで出発し、旧市街の北にある獅子門から旧市街に入り、イエス・キリストゆかりの「悲しみの道」（ヴィア・ドロドーサ）を歩く。色鮮やかな食料品や衣服、土産物などが通りの店先に並ぶ賑やかなイスラム地区を通り抜け、鐘の音が鳴り響くキリスト教地区に入ったところに聖墳墓教会があり、世

界中からの大勢の巡礼者や観光客が集まっている。ここが、キリスト教に帰依したローマ皇帝コンスタンティヌスの母后ヘレナが、西暦326年頃、巡礼に訪れて聖遺物を発見した場所で、イエス・キリストが磔刑され、復活したゴルゴダの丘だとされている。教会



(写真1)

内の小聖堂にはイエスの墓があり、各宗派の礼拝所が別々に設けられている。聖墳墓教会を出て、迷路のようなイスラム教地区にもう一度入り、しばらく歩くと、急に視界が開け、ヤッファ門前の広場に出る。ピタパンにサラダや肉などを挟んだ名物料理「シュワルマ」の昼食をとり、ひっそりとしたアルメニア教徒地区を通り抜けると、そこは、高級住宅が建ち並び、宝石やブランド品などを扱うショーウィンドーが集中するユダヤ教地区だ。

ユダヤ教地区には、古代の遺跡が整備・公開されている場所がいくつかある。その一つが、第二次ユダヤ戦争（バル・コホバの乱、西暦132～135年）の後、ハドリアヌス帝（76～138年）の命によって、ローマ式に改造された都市のカルドー（メイン・ストリート）の遺構で、現地にはコリント式の石柱列が修復されて立ち並んでいる（写真1）。神殿や町の建物が破壊されたばかりでなく、都市の名前も、ハドリアヌス帝のラテン名、「プブリウス・アエリウス・ハドリアヌス」にちなみ、アエリア・カピトリナと、ローマ風に変えられてしまったのだ。カピトリナの名称は、ローマ市のユピテル神殿のあったカピトリヌス丘に由来する。ユダヤ人地区をさらに進むと、今度は、ユダヤ教の祈りの場となっている西壁（いわゆる嘆きの壁）とその前の広場の光景が目の前に現れる（写真2）。広場の入り口には武装したイスラエル軍の兵士が管理する検問所があり、荷物検査を受けなければならない。ユダヤ教徒でない観光客も、キッパを頭に付けて西壁の前まで入ることができるが、安息日の土曜日は写真を撮ることができない。



(写真2)

ユダヤ・イスラエルの近現代史を研究するアモス・エロン氏は、エルサレムには記憶が人間の精神に及ぼす力が凝縮されているという。街に点在する数々の遺跡は対立し合うたくさんの記憶を喚び覚まし、複数の民族にとってかけがえのない都市、複数の宗教にとって聖なる都というイメージをつくり上げる。堅固な信仰と、宗教と紙一重の信念に呪縛され、拮抗する複数の信仰と真摯な民族意識と狂信主義が錯綜する、この都市では、いつの世にも、複数の矛盾するイメージが互いに反映し、また歪めあい、過去が現在に映し出される、とエロン氏は述べる。4つの地区に分割されたエルサレムの旧市街は、金曜はイスラム教、土曜はユダヤ教、日曜はキリスト教と、それぞれの宗教の祈りの声が、今も高らかに町全体を包み込む。

[参考文献]

アモス・エロン・村田靖子訳（1998）『エルサレム 記憶の戦場』リブラリア選書、法政大学出版局（原著は1989年）。